

ノーサイド

北原 巖 男

監督作品を鑑賞しました。都心の映画館は、若い男女も多く、ほぼ満席でした。映画の結末がどうなるかは、誰もが予め分かっています。歴史を変えることは出来ません。

でも、登場人物と一緒に映画の激しい事態展開に引き込まれて行くと、我が国の二・二六事件を思い出さざるを得ませんでした。い

1979年10月26日、パク・チョンヒ大統領が側近によって暗殺。国内に民主化の機運高まる。しかし、1979年12月12日、のちに大統領になり光州事件を武力弾圧したチョン・ドゥファン将軍が、軍事クーデターにより実権を奪取。

この韓国の歴史上の出来事をモチーフにしたフィクション映画、「ソウルの春」(キム・ソンス) その「権力の亡者」

ン・ドゥファン将軍が、「失敗すれば反逆罪」成功すれば革命だ」と言い切る姿には、リーダーとしての命を懸けた不退転の覚悟を感じます。劇中、状況が我に利あらずと見るや、責任逃れに走ろうとする先輩・上司、腰が引けている仲間・後輩たちを一喝するシー

ン。不思議なことに、それ

する在韓米軍司令官や在韓国米大使の、突き放すような対応にも関心を覚えませんでした。

以降、全員がそんなチョン・ドゥファン将軍に付いて行こうとするのです。更に自分の息のかかった組織内組織の人間は拡散し、クーデター側に加わる部隊・人数も増えて行きました。

映画を通じて、チョン・ドゥファン大統領は、天性のリーダーシップに及ばない。

また、本クーデターに対する在韓米軍司令官や在韓国米大使の、突き放すような対応にも関心を覚えませんでした。

映画「ソウルの春」

なおり、クレーター当時の相棒であり、チョン・ドゥファン大統領の後、大統領に就任したノ・テウ将軍の、映画上の人となりにも興味

いるのではないでしょうか。

「我は行く 若き魂が つかえた あの時 あの場所・・・エンディングに流れる歌声が、胸を突く。」(ジャーナリスト・大谷昭宏「ソウルの春」オフィシャルサイトより)

また、本クーデターに対する在韓米軍司令官や在韓国米大使の、突き放すような対応にも関心を覚えませんでした。

また、本クーデターに対する在韓米軍司令官や在韓国米大使の、突き放すような対応にも関心を覚えませんでした。

また、本クーデターに対する在韓米軍司令官や在韓国米大使の、突き放すような対応にも関心を覚えませんでした。

北原 巖男(きたはらい わお) 元防衛施設庁長官。元東ティモール大使。現日本東ティモール協会会長。(公社)隊友会理事